

月刊誌「アイソス」8月号36ページに掲載された私の文章は、元はもう少し長いもので、編集上の都合から短縮されたと思われます。少し意味がとりにくいところがありますので原文を載せておきます。

1. システム構築に関するコンサル手法

基本的には経営層やシステム構築担当者へのインタビューを繰り返し、何をどうしたいのかを質問と回答のキャッチボールの中で明確化(可視化)させていく手法をとっています。規格の適用などで「こうなさい」と言うことはなるべく控えます。コンサルタントは、あくまでも技術経営全体を見据えていなければならないと考えています。

2. 積極的なコンサル業務について

審査や監査に対し最も重要なことは、審査員や監査員に対し、事実を誤認させればよいと、受審側が考えてしまうことを防ぐことです。

これはシステム構築とは何の関係もありますが、多額の費用と長い時間を取り戻すために、往々にして受審側が陥る呪縛です。この点だけを積極的に行います。

審査員や監査員に対し、事実を誤認させればよいということを、審査側はどのように考えておられるのか。

私は中小建設業を顧客としていますがまず、この点で対応の適切な企業に出会ったことがごく少ないのです。(実績不足もあるでしょうが)

審査側の中にも、規格に適合したエビデンスがそろっていれば何の問題もなく通すと言う方もいます。(制度上仕方がないというニュアンスですが)

審査の瞬間に審査員を誤認させるために、壮大なムダを繰り返しているとしか思えません。抜き取りの審査だけで登録できる、こんなありがたい制度は、徐々にISOの意味を(日本では)無くしていく様な気がします。